

第2章 計画地周辺の現況

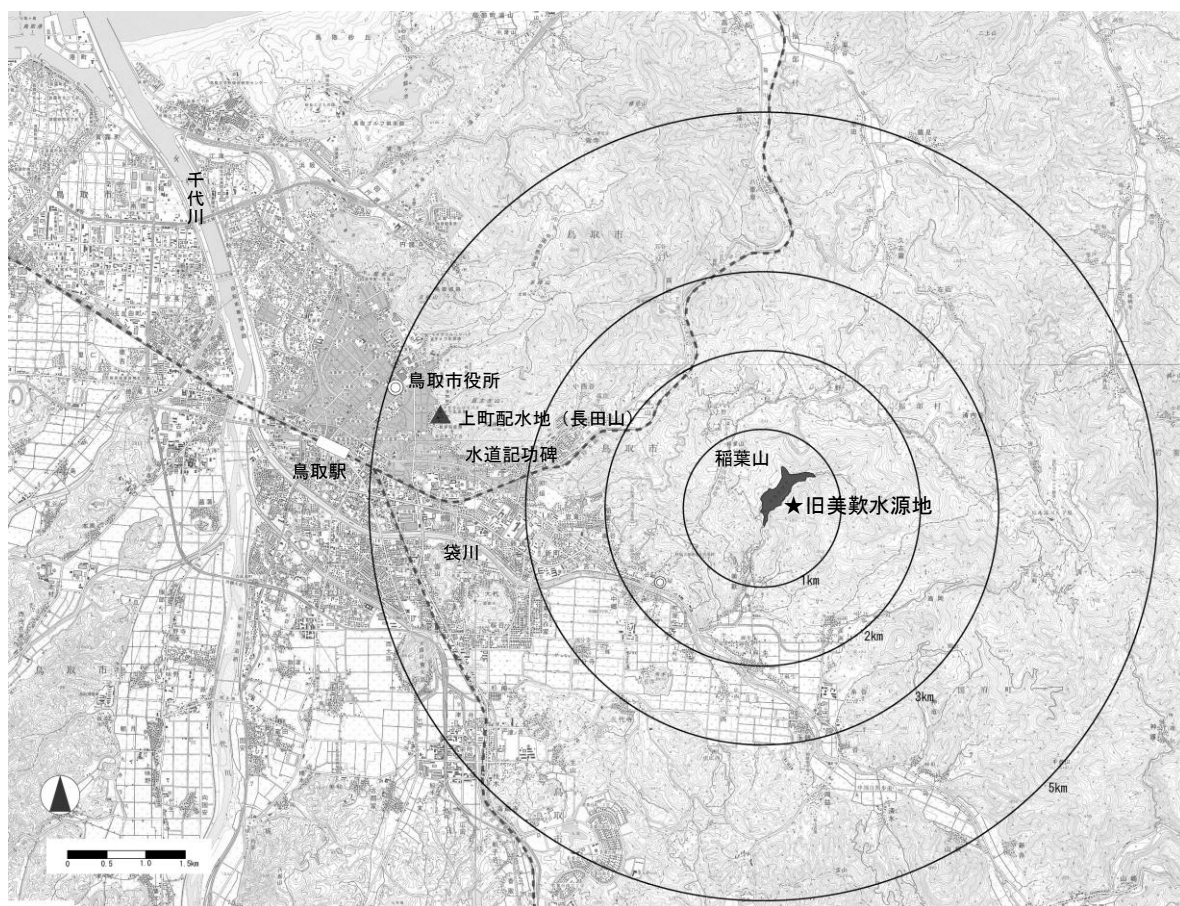
1. 計画地周辺の自然環境

1) 美歎川流域の自然環境（位置と地形）

美歎水源地は鳥取市街地より東南東約5kmの、国府町美歎地区の山あい、千代川水系美歎川上流に位置する。美歎川は、周囲を山頂部に平坦面が残る標高230～390mの山々に囲まれた流路長約4km、流域面積約4.0km²の小河川である。

源流は稲葉山（標高248.9m）の東南東の標高390mの山地であり、これより美歎水源地上流端付近までは蛇行しながら西方に流下した後に美歎ダムを経て南方へ転流し、美歎集落下流で高岡川、さらには袋川へと合流する。美歎ダムは袋川合流点より約2km上流に位置する。

稲葉山山腹斜面の平均傾斜は概して30°以下であり、特に右岸山腹は左岸側に比べ斜面勾配が緩くなっている。また、山頂平坦面が広く分布していることも特徴の一つである。



旧美歎水源地位置図

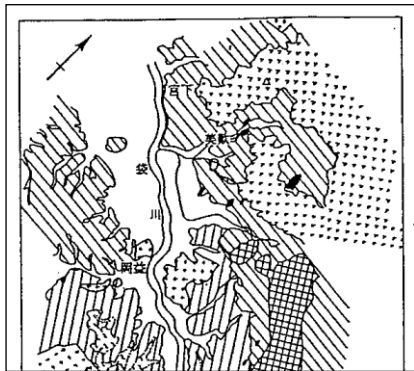
2) 地質

計画地地域の地質は、谷部と尾根部で大別され、前者は新第三系中新統の鳥取層群（普含寺泥岩層）、後者はそれらを覆う鮮新世の火山岩類（稲葉山玄武岩）から成る。

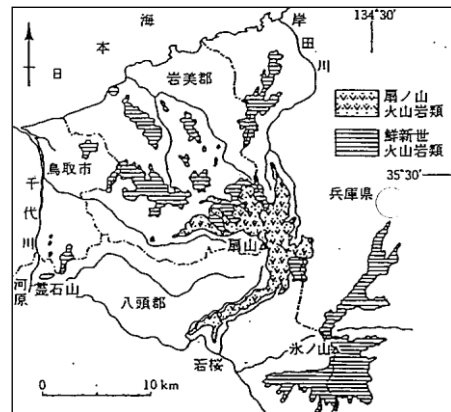
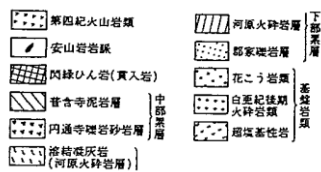
鳥取県東部には下～中部中新統の鳥取層群（下部・中部・上部の3累層）が分布する。

美敷川流域は、千代川の中・下流域とその支流の袋川流域に分布する東部地域に位置し、下部累層に対して、中部累層の普含寺泥岩層に当たる。普含寺泥岩層は主に黒色頁岩から成り、層厚は約800mである。この層の大部分は海成で動物化石が多く、国府町美敷ではカニ、オオグリコムシ、魚類、ウニなどの化石が多く報告されている。

美敷川流域の高標高部にみられる鮮新～更新世の火山岩類は構造的変形をほとんど受けておらず、一部にデイサイトがみられるが、主に玄武岩質安山岩～玄武岩の溶岩である。



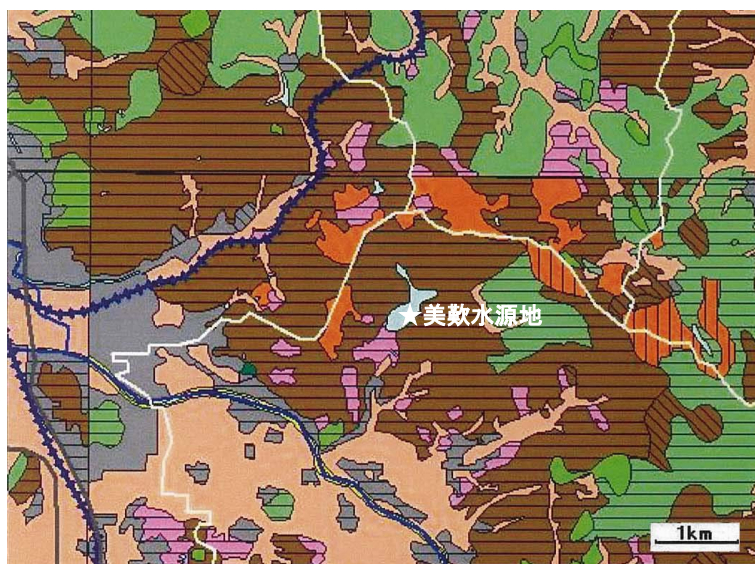
鳥取市南東部の新第三系地質図



鳥取市東部における鮮新世以後の火山岩類の分布

3) 植生

計画地周辺の周辺では、アカマツ・スギなどの植林地、スダジイ群落、シラカシ群集、クヌギなどの二次林が見られる。大半が、住宅地、農林業地として利用され、自然林はわずかに残されている程度である。また、因幡国庁跡周辺は、水田地帯が広がっている。



2. 計画地周辺の歴史環境

○美歎地区の歴史環境

旧美歎水源地水道施設は、稲葉山に発する袋川の支流、美歎川の上流に位置する。その下流の谷間に 75 戸の美歎集落が広がる。元は三谷村と記したが、元禄 14 年（1701）に美歎村に改められた。

□古代

美歎地区では、稲葉山南麓に古墳 10 数基が散在し、中には線刻絵画を描いたものもある。集落東側丘陵の山裾に姫塚と呼ばれる凝灰岩製の石材を丁寧加工した石室をもつ終末期古墳が築かれた。

白鳳時代の寺院では、国指定史跡の栃本廃寺跡の塔心礎が残されており、瓦の出土しない寺跡としても知られている。

旧美歎水源地水道施設が所在する旧国府町は、古代には因幡国府が置かれた政治・経済・文化の中心地である。大和三山になぞらえた因幡三山（面影山、甕山、今木山）に抱かれた因幡国の国府には、『万葉集』最後の歌を詠んだ大伴家持や、『古今和歌集』・『小倉百人一首』に稲葉山を詠んだ在原行平らが因幡国守として赴任し、万葉・王朝文化が華開いた。

□江戸時代

藩政時代は、法美郡広西郷美歎村となり、拝領高は 311 石余、家数は 47、荒砥石・巻柏・こぶ梨を産した（因幡志）。

□明治～平成

明治 22 年の市町村制実施に伴い岩美郡国府村美歎村となる。明治 12 年（1899）の家数は 65、産物は大根などがある。明治 40 年には、国府・法美・御陵村が合併し、宇倍野村誕生した。

昭和 32 年 1 月 1 日宇倍野村と大成村が合併した際、町名を因幡の国府にちなんで「国府町」と称した。

平成 16 年、鳥取県東部 9 市町村（鳥取市、国府町、福部村、河原町、用瀬町、佐治村、気高町、鹿野町、青谷町）の合併で鳥取市国府町となった。

3. 計画地周辺の社会環境

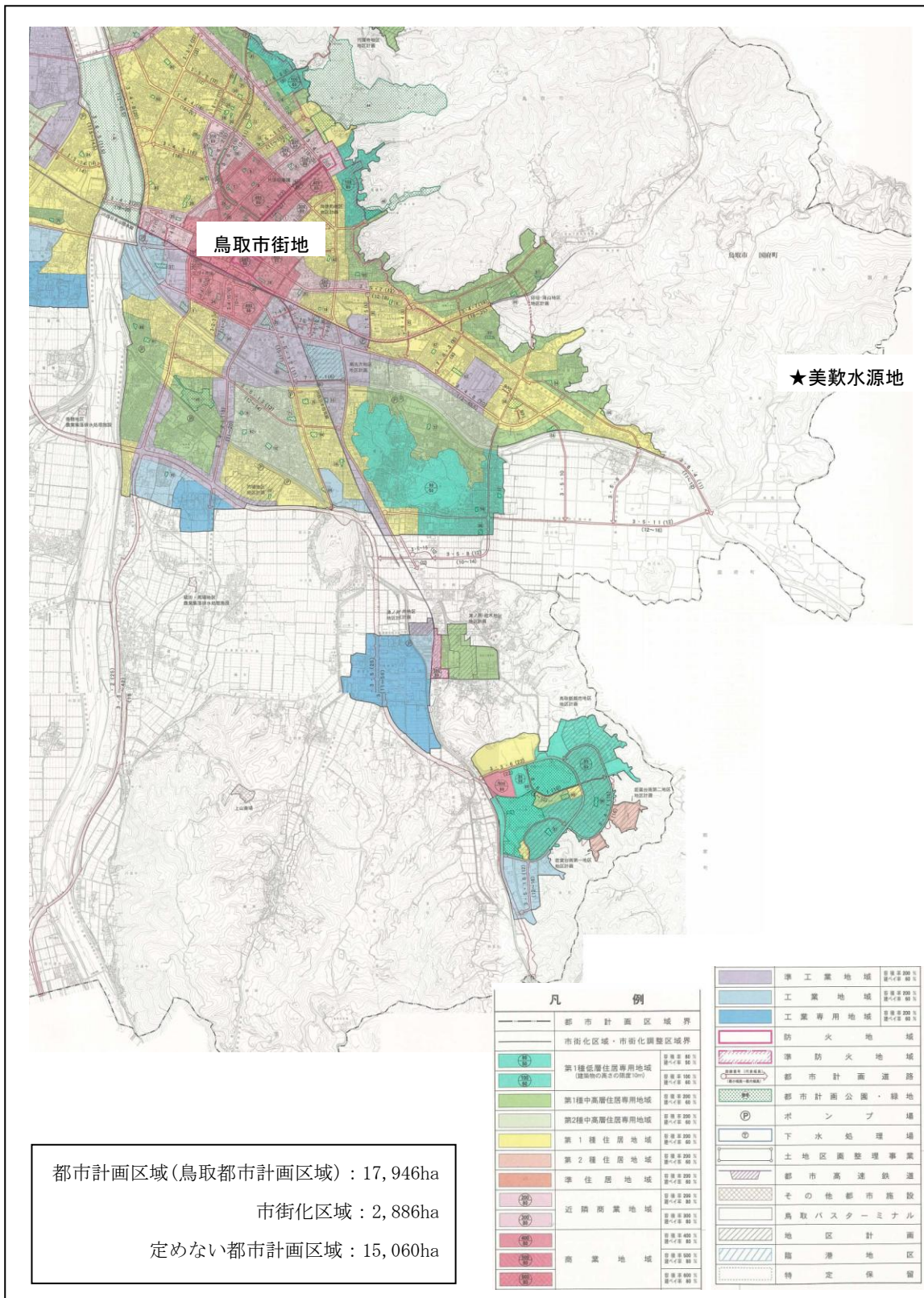
1) 計画地関連計画

鳥取市の都市計画区域については、鳥取都市計画でまとめられている。これによると、美敷水源を含む美敷地区は市街地調整区域に指定されている。

また、鳥取市都市計画マスタープランにおいて、「水と緑のネットワーク」や「レトロの森整備事業（美敷水源跡地整備）」の調査・検討を進める地域として位置づけられている。

鳥取県、鳥取市の地域再生計画として、平成 21 年度の開通に向けて、岩美町と美敷をつなぐ「岩美広域農道」の整備が進められている。

計 画	策定年月日	位置づけ
鳥取都市計画	平成 19 年	市街化調整区域
鳥取市都市計画 マスタープラン	平成 18 年	国府町は「東部地域」に区分され、「生活拠点」・「水と緑のネットワーク」として位置づけ。 公園・緑地の整備方針の中で、美敷水源は「自然環境保全エリア」・「レトロの森整備事業（美敷水源跡地整備）」の調査・検討を進める地域として位置づけ。
岩美広域農道	整備期間： 昭和 57 年 ～平成 21 年	区間：国府町美敷～福部村蔵見～岩美町岩井 規模：幅員：7m / 全長：19.2km H18/11/18 時点で鳥取市国府町美敷～福部町上野が開通



鳥取市都市計画図 (計画地周辺)

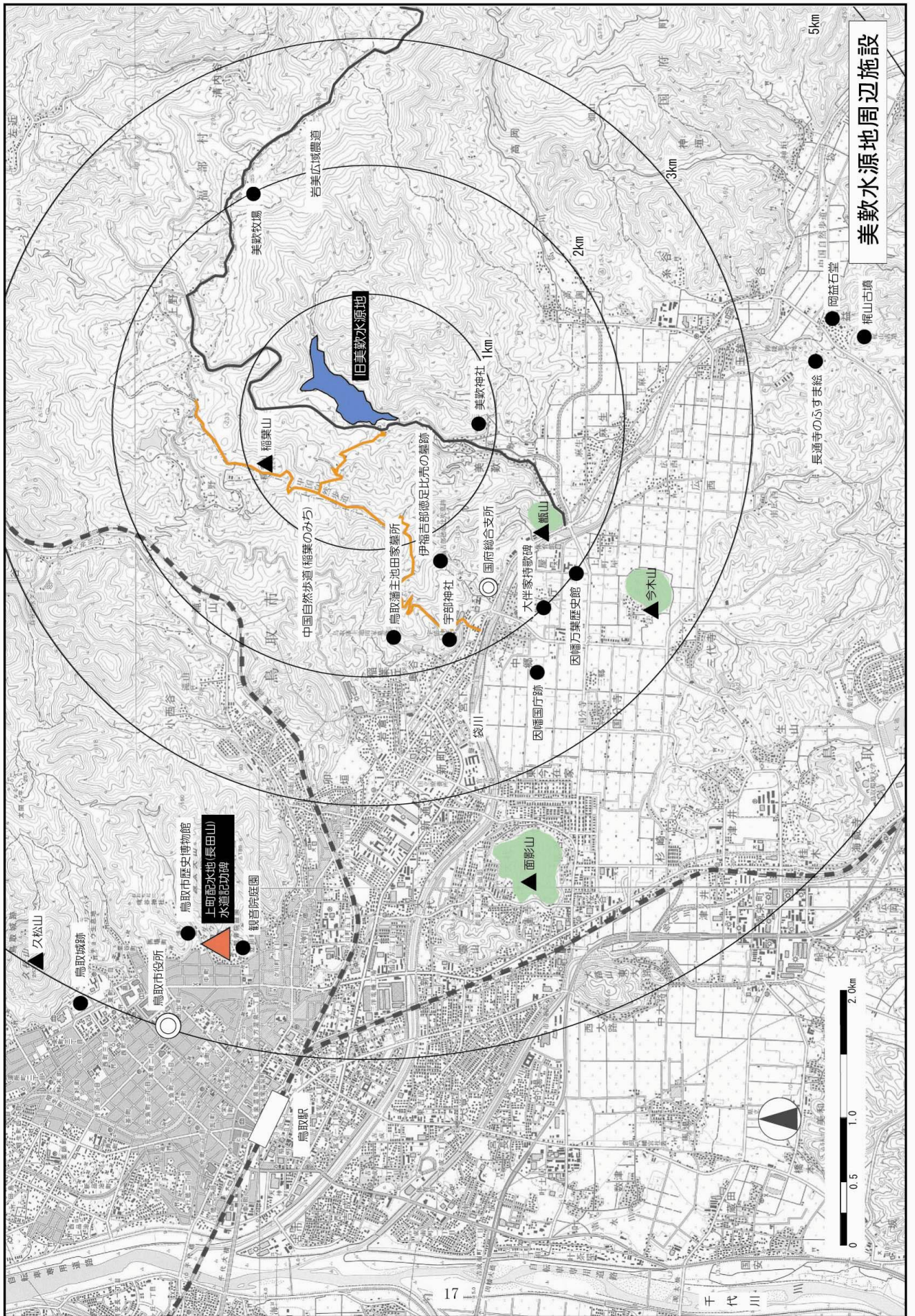
2) 計画地周辺の施設・利用状況

- ・ 稲葉山山頂に向けて、中国自然歩道「稲葉山へのみち（6.0km）」が設定されている。
- ・ 無料レンタサイクルが因幡万葉歴史館から無料で利用できる。
- ・ 鳥取市が主体となっているコミュニティ型循環路線バス「くる梨」「ループ麒麟獅子」は、因幡万葉歴史館を巡回していない。
- ・ 計画地の最寄りバス停は、日ノ丸バスの「日ノ丸中河原行」、「因幡万葉歴史館入口」である。

計画地周辺施設

美敷牧場	
	30haの牧場に乳牛・F1牛を放し飼い。餌やり、乳絞り等の体験、動物とのふれあい体験ができる。乳製品学習工場、バーベキューハウス、キャンプ場も附属している。
因幡三山	
	甕山（100m）・面影山（100m）・今木山（98m）が、因幡国庁を中心に三方に位置する。形の美しい山が3つ並び立つ様が大和三山を思わせることから、この名で呼ばれている。甕山は美敷集落の入口に位置し、山中鹿之助が武田高信を破った「鳥取城のタノモ崩れ」の舞台である。
因幡万葉歴史館	
	国府町ゆかりの歌人大伴家持をテーマとしたミュージアムである。マルチメディアを駆使した歴史本館、映像館、万葉植物の庭園など天平時代へと誘う。
因幡国庁跡	
	奈良、平安、鎌倉時代を通し、政治、経済、文化の中心であった因幡国府の境域。現在は田園地帯となっている。昭和52年柱根を残した建物遺構が発見されるなど、国庁の中心建物であることが確認された。昭和53年、国史跡に指定され、史跡公園として利用されている。
大伴家持歌碑	
	大伴家持による、天平宝字3年元旦の新年祝賀の宴での歌の歌碑。家持は万葉集4516首の最後にこの祝歌を載せ、民族不滅の宝典と称される万葉集20巻を集大成したといわれている。
宇倍神社	
	創建年代は648年（大化4年）。県内で最も多くの参拝者が訪れる因幡一ノ宮。祭神は武内宿禰。明治32年、全国の神社で最初に紙幣の図案となった、毎年4月21日の例大祭で奉納される県無形民俗文化財「麒麟獅子舞」は、主に因幡地方で見られる、古式ゆかしい行事である。 シラカシ林を主体とする照葉樹林に囲まれている。
鳥取藩主池田家墓所	
	初代光仲公から11代慶栄公までの歴代藩主墓所、270余墓の灯籠が整然と立ち並んでいる。歴代藩主墓碑は3メートル余の円頭形で亀趺（きふ）と呼ぶ異様な顔形をした亀台に乗せた、珍しいものである。江戸時代大名家の葬制を知る貴重な墓所として昭和56年、国の史跡に指定された。
伊福吉部徳足比売墓跡	
	伊福吉部徳足比売の骨蔵器を納めた石櫃が発見された所であり、大正13年に国史跡に指定された。この骨蔵器に刻まれた墓誌は、因幡国に残る最古の文字であり、歴史的意義が高い。

梶山古墳	
	彩色壁画のある古墳。昭和 54 年に国指定史跡に指定された。
岡益の石堂	
	山陰最古の構築物と言われる凝灰岩で作られた精巧な石造建築物。 石柱は、法隆寺回廊柱にも見られるエンタシスである。中台石裏側には、法隆寺壁画にも見られる忍冬唐草文が刻まれ、中国仏教文化の影響を強く受けた塔ともいわれている。
雨滝	
	国府町にある滝で、古来より霊場として修行・信仰の場となっており、日本の滝百選に選定されている。扇ノ山を源流とする袋川上流の標高 500m 地点にあり、原生林はトチ・ケヤキ・ブナなどの落葉樹が多く、秋には紅葉の名所となる。毎年 6 月には「滝開き祭」が開催され、傘踊りなどの地域伝統行事や神事などが行われる。
美歎神社	
	美歎神社は、平安時代には「延喜式」神名帳に載り、因幡国守が参拝するなど社格が高く、法美郡 9 座の一つとされる、地域から尊崇された神社である。 元は屋敷鳴（奥美歎）に鎮座したが、金内（二度村）に移り、さらに現在地に遷座したと伝える。貞観 16 年（874）に従 5 位上を授けられ、承徳 3 年（1099）には因幡国守平時範が一宮～服部社を経て「美歎社」に至って巡拝と奉幣を終えるなど、地域の人々に崇敬された（時範記）。
観音堂	
	集落東側の観音堂は、弘仁 3 年（812）に役行者の修験場として創建されたと伝えられるが、次第に荒廃し、後に三国山福田寺として再興したと伝える。堂内に安置されている如意輪観音は、内乱で寺院が焼失した際、柳の古木にひっかかり難を逃れ、雀の群れがその居場所を人々に教えたことから、「雀観音」と呼ばれるようになったという。
荒砥石産出場	
	美歎川上流には宇倍野に居住した因幡小鍛冶景長が発見した荒砥石産出場があり（因幡志）、南北朝の室町時代の因幡の刀工として知られた。
不動尊像・腰折地藏	
	美歎川源流の滝の下には石の不動尊像がある。 また、集落南の山裾の腰折地藏は、腰痛平癒の効能と旅人の無事を祈ったとされ、山裾の小路は稲葉山を通り、京へ行く重要なものであったという。



美敷水源地周辺施設

